

(様式)

令和5年度 高松中学区グループ学校評価書

学校名: 静岡市立富士見小学校

大項目	中項目	グループ校の評価指標	自己評価	改善策(来年度の目標設定,具体的な取組目標)	
静岡型小中一貫教育における特色ある教育活動	【視点1】 学校の教育目標をグループ校で共有する	① (指標14)「自分には、よいところがあると思う」児童生徒の割合 80% (学校説明) 児童へのアンケートの結果では、肯定的な回答が6月(81.7%)から12月(79.8%)とやや減少傾向にあった。しかし、教職員へのアンケート結果では、肯定的な回答の割合が86.3%と高く、年間を通して、児童が自分のめあてに向かい、行事や活動でチャレンジしたことを高く評価していることがわかる。大切なことは、児童がチャレンジの成果を実感することであるので、自己肯定感がさらに増すよう、三部での活動を精選し、一点突破で学校全体で取り組んでいきたい。	A	【視点1】 一人一人の児童が「自分のめあて」の実現に向け努力ができるよう、ていねいに支援をしている教職員の姿が見られる。児童一人一人のめあてや活動・学習状況把握のため、寄り添っている場面として、①「(学年別)体育参観」②「6年生ありがとうの会」を挙げる。①では保護者や教職員の見守る中、児童たちが学級レールに取り組み、顔を赤らめて友達を応援する児童が顕著であった。声を出さずとも、走る友達をずっと目で追う児童もいる。走ることに苦手意識をもつ児童も、友達からの応援を背中を受け、精一杯走っていた。「自分のめあて」に向けて努力するには、友達からの応援や励ましが大きな影響を及ぼすことを、児童自身が実感する支援を教職員が積み重ねていると考えられる。また、②「6年生ありがとうの会」では、5年生に学校全体を動かす計画運営が委ねられ、一人一人の児童が自分が貢献できる形でミッションを果たした。仕事が目立つ・目立たないという見方ではなく、自分ができていること(よいところや強み)を生かして学校を創るとして、富士見小で今後大切にしていきたいべき視点である。他方、児童にとって困難や「うまいかなかった」と感じる場面は、時期や場面によってさまざまである。年間を通じてみれば、肯定感が下がったり自信が失われる時もあるのが自然である。ゆっくと強みを見つけ、豊かな人生を切り拓く小さな一歩を積み重ねる児童に、長期的なスパンで寄り添う教職員であることを望む。 【視点2・GIGAスクール構想】 授業において、児童は端末を自分なりに活用し学んでいる。国語科ではICTを活用し「読み取りクイズ」を作成して友達に解いてもらったり、複数の教科で「自分が調べたい時に」「調べたいことを」検索し、友達と検索結果をもとに意見交換したりしている様子であった。児童は友達と意見交換や議論をすることを通じて、問いを見つけ、新しい考えや価値観を発見したり創ったりすることを実感しているようである。児童はICTを日常使していると考え、教職員の適切な支援のもと、使う場面や方法は児童になるべく委ねられていくことに期待する。	
	【視点2】 9年間の連続性、系統性を強化した教育課程を編成・実施する	② (独自)「ICTを活用することによって、自分の考えや仲間との関わり合いをもち、主体的に学習できた。」友達と話し合うことにより、主体的に学習することができた。」児童生徒の割合 75% (学校説明) アンケートの結果によると、クロムブックの導入により1年生以上の児童、保護者はICTの活用に関する肯定的な意見が多い。今後このクロムブックの活用が子ども、教師の関わりを深めたり、主体的な学びを支えたりする大きな鍵となると考える。しかし、教職員のクロムブックの技能には差が見られるので、研修を通して全体で活用方法を共有できるようにしていくことが大切である。	B	一人一端末の実現により、児童が学習を効率的に進め、より深めるための一つの新しい道具を手に入れた。本校でも、学習場面での交換的な活用方法を模索しているところである。今後、低学年から、ICT支援員を活用したり、校内でも情報モラルについて発達段階に応じて指導したりして、基本的な操作方法、活用方法を十分に児童が理解したうえで児童が主体的に授業でクロムブックをはじめ、情報機器の活用を選択できるよう環境整備を行ってきたい。	
	【視点3】 教職員の協働、児童生徒の交流	③ (指標23)「学年や校種の枠を越えて、連携を図っている」教職員の割合 75% (学校説明) 教職員のアンケートの回答の割合では、87%と肯定的な意見が高く、年3回のグループ研修を通して、柱であるSSTの研修を4校で進めることができている。大切なことは、これをよりよい方向に進めていくために成果と課題を明確にして、次年度へとつなげていくことである。そして、このSSTを教員・児童だけのことにするだけではなく、保護者や地域を交えながら進めていくことでより大きな成果となるので、発信することを次年度の課題としていく。 ④ (独自)友達や先生、地域の方々にあいさつをしている児童生徒の割合 80% (学校説明) 児童へのアンケートでは、88.7%の児童が肯定的な回答をしている。また、保護者についても77.8%が肯定的な回答をしている。両者とも令和4年度と比べるとポイントの向上が見られている。教師の声掛けだけではなく、児童会本部と連携してあいさつの改善に取り組んだ成果といえる。特に、児童会本部が主体的に取り組んだ「あいさつごころく」は児童の中で定着し、楽しみながらあいさつをする姿が見られた。しかし、個人差は大きく、あいさつに対して抵抗感をもっている児童も見られるため個別に対応していく必要がある。また、地域や保護者の方にも、あいさつの大切さを啓発し、あいさつのできる学区にしていきたい。	A	本校の児童の家庭環境や一人一人の特性を十分に理解した上で、来年度も、グループ校4校で、ソーシャルスキルトレーニング(SST)やあいさつなど、潤いのある人間関係の構築に向けて、取り組んでいきたい。 その際、SSTにしても、あいさつにしても学校全体で一律に一つのモデルに児童を押し込めるのではなく、その子ならではの表現方法を認め、互いに認め合える校風を形成していきたい。そのためには、大きな声であいさつのできる子、たまたま小さな声でも目と目を合わせてあいさつをする子、ジェスチャーでサインをおくる子などその子ならではのやり方を尊重し、本当の意味で心と心がつながる関係が大事であると考える。 そこで、来年度は「ありがとう」の一つのキーワードとし、児童も教職員も、互いに尊重し合えるよう、三部(生徒指導・研修・特別活動)をはじめ、様々な場面で価値付けていきたい。	
	【視点4】 地域との連携	⑤ (独自)「地域のひとつのことと触れ合うことで、学習活動に興味をもつことができた」児童生徒の割合 75% (学校説明) 児童へのアンケートでは、肯定的な回答が88.9%と非常に高かった。各学年が、年間を通して計画的に生活科や総合の時間をはじめ、様々な場面で学校外の教育(ひと・こと・もの)を活用して学習を進めた結果と考える。ただ、保護者アンケートの結果が否定的な回答(「あまりそう思わない」「全然そう思わない」)が25.4%であった。保護者への情報発信の不足が一因と考えられる。	A	「あいさつ」については、児童は清々しくあいさつをしている姿がある。児童会が主体となって「あいさつごころく」を作成し、あいさつすると楽しくなる。素敵な学校や学級になることを児童同士で共有している。教職員の支援のあり方として、表面的なあいさつ指導にとどまらず、児童一人一人があいさつの意味や価値を大切にしていける支援が望まれる。富士見小の児童は多様で、児童の背景や生活経験も一律ではない。学校全体として、「自分のめあて」を実現するためのチャレンジを支えるのであれば「明るく元気に誰にでもあいさつをする」ことを指導の焦点とすることは、児童の価値観を一律にし、均一化する教育となってしまう危険性がある。児童自身があいさつの価値を実感し、自分らしく実践しようとしてチャレンジすることを温かく支援する教職員、友達の存在が、その子らしい「つながり」を創っていくことに寄与するだろう。	
学校環境	⑥ (独自)超過勤務 月45時間以内達成者の割合 75% (学校説明) 超過勤務者が、4月44%、5月44%、6月50%、11月38%と多かった。年度の初めは、学校・学年・学級経営の見通しを立てたり準備の多い時期で、6月、11月は研究授業の多い時期となる。定時退庁する場合も持ち帰り仕事となるため、新たな対策が必要と考える。	B	【視点3】 校種や学年を越えた教職員の学びは、児童に還元され、大きな効果を生んでいる。普段接することのない小・中学校の教職員との意見交換では、SSTの理論や手法の共有を越え、各教職員の児童観や教育観に及ぶ考えが頻繁に交わされた。従来の指導や支援を揺さぶられる経験は、今後の教職員自身の姿勢や児童との向き合い方を問い直す機会となっている。 【視点4】 地域の外部講師が児童の学びを支えている。防災や地域学習など、地域の方から直接話を聞くことで、多くの児童が主体的に疑問や問いを見つけ、質問している。また、旗振りや見守り運動をしている地域の方には、児童が積極的にあいさつをしたり話しかけたりしている。授業での枠組みに限らず、児童と声を掛け合える関係づくりが新たな地域・社会づくりに寄与する。		
	グループ校の軸となる取組・活動	グループ校の評価指標	自己評価		
	「ソーシャルスキルトレーニング」を軸とした取組の充実	⑧ (独自)「友達や周りの人の気持ちを考えて行動している」児童生徒の割合 75% (学校説明) 児童アンケートの肯定的な回答の割合は85.6%と非常に高かった。児童がSSTの授業を通して、自分の気持ちを整えたり、相手の気持ちを考えることができたことと実感した表れであると考えられる。同時に、高松中グループ小中一貫教育の軸となる取組として、四校で足並みをそろえ、教職員が研修を進めてきた成果でもある。来年度は、さらに質の高まりを目指して取り組んでいきたい。	A	本年度は、グループ校の軸となる取組・活動をソーシャルスキルトレーニング(SST)とした初年度であった。年間を通して、「聴くスキル」「話すスキル」「気持ちのよいあいさつ」「あたためた言葉かけ」「感情をコントロールする」の5つの観点で、グループ校で授業参観やSSTについての研修の場を設けるなど、試行錯誤しながら実践を行ってきた。また、年度末には、本年度の新しい課題を踏まえ、各校の特別支援コーディネーターを中心としたSST部会が新しい計画を作成することができた。そこで来年度は、さらにSSTがより効果的に児童の自己肯定感の向上につながるよう、継続し取り組んでいきたい。	
各評価校の	大項目	中項目	評価指標	自己評価	
	GIGAスクール構想への取組	一人1台端末の活用	⑨ (独自)端末の活用方法について教職員の研修を行い、児童が授業の中で活用している割合80% (学校説明) クロムブックを使う学習に対して、肯定的な回答の割合が、児童全体で87.1%、教職員で86.9%と非常に高かった。現在、AIDリルについても試行中である。端末の操作方法や情報モラル、セキュリティなどについても計画的に扱い、ICT機器の活用をさらに進めていきたい。	A	改善策(来年度の目標設定,具体的な取組目標) 来年度も、クロムブックを使うことが目的ではなく、学習の一つの道具として、児童の選択の幅が広がるよう、6年間を通じて、ICT支援員を効果的に活用したり、校内でも情報モラルについて発達段階に応じて指導したりして、基本的な操作方法、活用方法を指導していきたい。

大項目	中項目	評価指標	自己評価	改善策(来年度の目標設定,具体的な取組目標)
静岡型小中一貫教育における特色ある教育活動	学力の状況 (全国学力・学習状況調査)	小学校 (学校説明) 国語については県・全国平均をやや下回り、算数については県・全国平均とほぼ同等の結果であった。国語では文章の種類やその特徴及び日常よく使われる敬語などの知識及び技能に関して、比較的身に付いている。その一方で、資料から読み取って分かったことや自分の考えを〇〇文字以内で書く等、条件を満たして「書くこと」に関して課題が見られた。算数では図を基に商の意味を考えたり、台形や正三角形の意味や性質を理解したりと「数と計算」「図形」の各領域については、比較的身に付いている。その一方で、数量の変化や関係を捉えたり、データを活用したりして求め方を記述する問で課題が見られた。 中学校 (学校説明) 国語科・数学科・英語科とも「知識・技能」「思考・判断・表現」どちらの観点においても全国の平均を大きく上回っており、大変良好な結果であった。また、英語科「話すこと」調査においても、全国の平均を上回った。家庭学習の時間について、平日2時間以上、休日3時間以上取り組んでいる生徒の割合が高いが、自分で計画を立てて勉強をしている生徒の割合が低い。今後は、自分で計画を立て、粘り強く学習に取り組む生徒の育成を目指し、学活の時間を使って学習計画作りを丁寧に指導し、各教科の授業でも予習や復習の仕方などを指導していく。また、AIDリルを積極的に活用し、基礎学力の向上に努める。	A	改善策(来年度の目標設定,具体的な取組目標) 本校の課題として上がった『条件を満たして書く力』や、『資料を分析する力』、『資料活用能力』については、主要教科での指導も大切であるが、総合的な学習を中心とした教科横断的な視点、さらには、特別活動等での児童が主体となって計画、運営する場面など、学校生活の様々な場で力を付けていくことが、これから社会で必要とされるまでに、生きる力である。ただ、年間の授業時数は限られているので、新しいものを作り出すだけでなく、現状のカリキュラムを見直ししたり、組み替えたり、関連付けたりして、上記の課題の克服のため、あきらめずに取り組むことが肝要であろう。
	体力の状況 (新体力テスト、全国体力・運動能力、運動習慣調査)	小学校 (学校説明) 運動が好きな児童、運動が大切だと思っている児童の割合が多いが、運動時間で見ると男女ともに平均を下回っている。今年度は運動場の改修工事があったため、十分な運動の機会の確保ができなかったこともあり、運動習慣がさらに減ってしまった。委員会活動で学校全体を巻き込んだイベントなどを計画し、休み時間以外に出る時間を増やすとともに、保健で運動の大切さについて指導し運動習慣の定着を図っていく。新体力テストの実技データから敏捷性、瞬発力に課題が見られた。陸上競技やタグラグビーなどで力を高められるように意識して指導していきたい。 中学校 (学校説明) 体育に関する意欲は高い生徒が多い反面、女子生徒の意欲が比較的に低いように思われる。特に、複数人で連係する動きや自身の体を思い通りにコントロールする力が欠けているように思われる。また、感染症対策として距離をとる生活を続ける反動も有り、体を動かすことや協力して何かを達成することに対して消極的に行動する傾向が強い。中学では、自身の発育発達について理解を深め、どのように体を動かすことが良いのか、他者との協力はどのように行うと良いのかを考えたり、表現することを増やしていきたい。新体力テストの結果から、巧緻性や持久力を更に高めていけるように、体作り運動を取り入れていきたい。	B	改善策(来年度の目標設定,具体的な取組目標) グラウンド改修工事が終わり、今後体を動かす児童が増え、友達と楽しみながら運動を楽しむと推測される。「(学年別)体育参観」では、個人の走力や得意不得意に関わらず、児童が友達の力を借りながら、運動を楽しんでいた。タグラグビーなど、児童の興味・関心をもち取り組むことができ、運動能力の向上が期待される活動の実践を経て、結果を踏まえた児童の状況把握に努めたい。一方、個人の能力の程度に関わらず、友達と体を動かすことを楽しむことは、児童が中・高校生、社会人と成長していく中で、運動習慣の獲得に重要な意味をもつ。運動能力の向上に過度に主眼を置かず、多様な側面をもつ豊かなスポーツライフや健康という考え方についても児童と考える機会をもつていただきたい。
生徒指導の状況 (学校いじめ防止基本方針)		(学校説明) 4月の職員会議で全職員に周知し、併せて保護者・児童向けにもいじめ防止基本方針のプリントを配付した。学年集会で児童に、懇談会で保護者向けに「職員は必ずいじめからあなたを守る」ということを伝えている。また、学校ホームページも毎年更新し、内容の見直しを行っている。さらに、年3回の悩み事アンケートを実施し、悩み事を抱える児童に対しては100%話を聞き対応をしている。 「いじめは必ずあるものであり、『チームで対応する』という意識を持ちましょう。」と職員打ち合わせを通して全職員に周知徹底している。生徒指導上の問題が起こった場合、必ず学年主任や管理職への報告を行い、校長を中心にして組織的な対応をとることができた。	A	改善策(来年度の目標設定,具体的な取組目標) 学校は、学習する場とともに、人間関係を学ぶ大切な場である。多くの人間が共同生活を行う以上、トラブルや行き違い等があるのは当然である今後も、「人間関係のトラブルは必ずある」「職員は必ず、あなたを支える。」「チームとして対応する」という共通認識のもと、安心安全基地としての富士見小学校にしていきたい。